

露西亜（ロシア）負けたロシア負けたり露西亜負けた露西亜負けたりロシア負けたり

されど又世界は敵ぞせかいてき世界敵なりせかいてきなり故に又金を溜むべし金ためよ金を溜むべし金をたむべし

三閣下万々歳々万々歳々万々歳々万々の歳吟じた後、満場の拍手喝采がしばし鳴り止まなかった。静まるのを待って、伊東元帥がやおら立ち上がり、「歓迎の辞としてこれに勝るものはない。」と厚く札を述べると、再び大拍手が起こった。

そして、感（かん）を同じうする者として、五無齋先生の原稿（げんこう）を記念（きねん）に受け取った。鈴木小右衛門（すずき せうゑもん）長野市長（ながの しやうしやう）が三將軍（さんげん）の席（せき）にお酌（しやく）に回ると、東郷（とうきやう）海軍大將（かいぐん たいしやう）が、「今（いま）の人は誰（たれ）か。」と訊（き）いた。鈴木市長（すずき しやうしやう）は、「五無齋（ごむさい）・保科（たへし）百助（ももすけ）。」と答（こた）えた。すると、海軍大將（かいぐん たいしやう）は小さな声（こゑ）で、「信州（しんしゅう）には怖い人がおられますね……。」と言（い）った。

五無齋（ごむさい）先生のこの行為（ゐゐ）から、先生（せんせい）を敬慕（けいぼ）する多くの方（かた）の心（こゝろ）の裡（うち）を察（さつ）することができるよう（よう）な氣（き）がします。痛快（つうかい）極（ごく）まりなく、単（ただ）なる奇行（きぎやう）奇言（きげん）を遙（はるか）かに超（こ）えた五無齋（ごむさい）先生の桁外（けいがい）れな「人間力（にんげんりき）」に圧倒（あつぱん）されるの（の）を感（かん）ずるから（か）らです。

城山館（じやうさんくわん）における先生（せんせい）の朗詠（らうぎやう）は、ややもすれば、戦争（せんそう）や軍国化（ぐんこくか）を礼讚（らいさん）する行為（ゐゐ）と

誤解（ごかい）されそう（そう）です。しかし、それは明らかに杞憂（きゆう）かと存（ぞん）じます。

と申（まを）しますのは、先生（せんせい）の行動（ぎやうどう）の「軸足（じくそく）」は常に教育（きやういく）の場（ば）にあり、「教育（きやういく）一（いつ）張り（はり）」を押し通（とお）したから（か）らです。先生（せんせい）は、生涯（じやうがい）、「国家（こくが）永遠（えいゑん）の計（はかり）は、人（ひと）を造（つく）るにあり。人（ひと）を造（つく）らんとすれば須（す）く教育（きやういく）の振興（きんきやう）を図（はか）らねばならぬ。」と考（かん）え、「教育（きやういく）が大切（たいせつ）だ。戦争（せんそう）は、大切（たいせつ）な子ども（こども）の教育（きやういく）の機会（きかい）を奪（うば）ってしま（しま）う。」という信（しん）念（ねん）を貫（つら）いたの（の）です。大日本（だいにっぽん）帝国（ていこく）憲法（けんぱう）（明治（めいし）22年（ねん））及び教育（きやういく）勅語（ていご）（明治（めいし）23年（ねん））の時代（じだい）に、教育（きやういく）の主体性（しゆたいせい）と独立性（どくりんせい）を唱（とな）え、その実現（じつげん）のために尽（じん）力（りき）したので（の）です。

それは取り（と）りも直（ただ）さず、人格（じんかく）の完成（わんせい）をめざす教育（きやういく）が平等（びやうどう）（機会（きかい）均（ひら）等（とう））に行（い）われる世（よ）の中（なか）こそ、平和（へいわ）で、民主（みんしゆ）的な社会（しゃかい）である、と考（かん）えていた（いた）から（か）らなのでしょう。

奇行（きぎやう）の背後（かゝ）に横（よこ）たわつて（た）いる五無齋（ごむさい）先生（せんせい）の実像（じつざう）とは、教育（きやういく）に關（か）る活動（かどつう）や事業（じぎやう）に全身（ぜんしん）全靈（ぜんれい）を傾（かたむ）けるエネルギー（えんじやう）となつた「無垢（むこ）なる教育（きやういく）的情熱（じやうねつ）」（井出（いで）孫（まご）六（むつ）氏（しん））、そして、奇行（きぎやう）の底（そこ）にある強烈（きやうりやう）な反骨心（はんこつしん）、旺盛（わうせい）なユーモア（うもあ）精神（せいしん）、弱者（じやくしやく）に對（たい）する優（ゆう）しさ、寛大（かんたい）さにある（あ）る、と思（おも）います。

このよう（よう）な五無齋（ごむさい）先生（せんせい）の実像（じつざう）にふれた（た）という方（かた）に、老生（らうせい）は、立科（たちか）町（ちやう）在（ざい）住（じゆう）の卯月（うづき）雪花（せつが）菜（さい）氏（し）が書（か）かれた歴史（れきし）小説（せうせつ）「教育（きやういく）のひと（ひと）と保科（たへし）五無齋（ごむさい）」（文芸（ぶんぎ）社（しゃ）発行（はうぎやう））をお薦（すす）

め致（いた）します。

浅学（せんがく）の身（み）が申（まを）し上げる（あ）るのは甚（はな）だお（お）こがましいこと（こと）ですが、五無齋（ごむさい）先生（せんせい）の教育（きやういく）に寄（よ）せる情熱（じやうねつ）や教師（かぎし）としての画期（かくき）的な実践（じつせん）、信州（しんしゅう）教育（きやういく）に残（のこ）した足跡（あしあと）、人間（にんげん）味（あじ）あふれるお人（ひと）となり（なり）が、平明（へいめい）な文体（ぶんたい）で、非常（ひじょう）に興（き）味（み）深く描（えが）かれて（た）いるから（か）らです。と同時（どうじ）に、あらため（た）て、教育（きやういく）とは何（なに）か、学校（がく）とは何（なに）か、という教育（きやういく）の原（げん）点（てん）について考（かん）えさせ（さ）てくれるから（か）らです。

五無齋（ごむさい）先生（せんせい）没後（ぼつご）後、長野（ながの）県（けん）が、昭和（しやうわ）13年（ねん）に始（はじめ）まる「満蒙（まんもう）開拓（かいとく）青少年（せうねん）義勇軍（ぎゆうぐん）」に送（お）出した人（ひと）数（かず）（約（やく）6千（せん）8百（ひゃく）人（にん））は全（ぜん）国（こく）一（いつ）で、その大半（たいてい）は教師（かぎし）の強（きやう）い勸（すす）めによる（よ）るものでした。教師（かぎし）（学校（がく））が、国策（こくさく）に従（したが）い、県（けん）の要請（ようせい）に應（こた）えて、教（きやう）え子（こ）を「戦地（せんち）」に送（お）り出した（だ）のです。国策（こくさく）を鼓舞（こほ）するジャーナリズム（ジャーナリズム）（新聞（しんぶん））の扇動（せんどう）的な報（ほう）道（だう）も、その背景（はいけい）にあり（あ）りましたが、今（いま）、学校（がく）教育（きやういく）もジャーナリズム（ジャーナリズム）も、そして、日本人（にっぽんじん）誰（たれ）もが、これ（こゝ）らの歴史（れきし）的な反省（はんせい）を踏（ふ）まえて、「戦争（せんそう）の放棄（ほうき）」と「恒久（こうきう）の平和（へいわ）」を念願（ねんがん）して（し）ている、と信（しん）じて（て）いま（いま）す。

ところが、老（お）い（い）の杞憂（きゆう）であれば（れば）よい（よい）のですが、昨（け）今（いま）、日本（にっぽん）を先導（せんどう）する一（いち）部のリーダー（リーダー）の言（こと）動（どう）に、このよう（よう）な反省（はんせい）と誓（ちか）いが踏（ふ）みにじ（じ）られ、子ども（こども）から教育（きやういく）を奪（うば）い、50年（ごじゅうねん）後（ご）、100年（ひゃくねん）後（ご）の日本（にっぽん）に取（と）り返（かへ）しのつかない禍根（わざがね）を残（のこ）してしま（しま）うのでは

ないかと、い（い）う不安（ふあん）を覚（さ）えます。

五無齋（ごむさい）先生（せんせい）が誕生（たんとしん）し、他界（たがい）した月（つき）、6月に、三石（さんせき）勝（かち）五郎（ごらう）翁（おきな）の言葉（ことば）をし（し）みじ（じ）みと思（おも）い起（おこ）して（て）いま（いま）す。「ああ、五無齋（ごむさい）この世（よ）にあら（あ）らば、今日（けふ）のわれら（われら）になん（なん）という（い）うであ（あ）らう。」

《参考（さんこう）図書（としよ）》

- 「五無齋（ごむさい）保科（たへし）百助（ももすけ）全集（ぜんしゅう）」 佐久（さく）教育（きやういく）会（かい）
- 「五無齋（ごむさい）保科（たへし）百助（ももすけ）評伝（へいでん）」 佐久（さく）教育（きやういく）会（かい）
- 「保科（たへし）五無齋（ごむさい）石（いし）の狩人（かりびと）」 井出（いで）孫（まご）六（むつ）八（はち）
- 「野人（やびと）教育家（きやういくか）・保科（たへし）百助（ももすけ）の生涯（じやうがい）」 五無齋（ごむさい）と信州（しんしゅう）教育（きやういく） 平沢（ひらさわ）信康（しんかう）
- 「教育（きやういく）のひと（ひと）と保科（たへし）五無齋（ごむさい）」 卯月（うづき）雪花（せつが）
- 「詩（し）伝（でん）・保科（たへし）五無齋（ごむさい）一（いち）三石（さんせき）勝（かち）五郎（ごらう）」 中村（なかむら）勝美（かみ）
- 「近代（きんたい）佐久（さく）を開（ひら）いた人（ひと）たち」 中村（なかむら）勝美（かみ）



立科（たちか）中（ちゆう）学校（がく） 生徒（せいと）作品（さく）